



経理部門の効率化支援

ブラックラインは、企業の会計や決算業務をクラウドで自動化して効率的に行うソリューションを提供する。NASDAQを始め、金融機関など150カ国・2800社が利用。2019年に国内企業へのサービス導入を本格的に開始した。日本人の古濱淑子代表取締役社長(47)に事業の概要や今後の国内戦略を聞いた。



ブラックライン

代表取締役社長 古濱 淑子氏

——主要な事業は。 締めを待たずに毎日の「会計システムを補完するソリューションだ。経理部門は決算期に業務が集中して各データの集計に時間がかかり、財務分析を徹底できないという課題を抱えている。原因は勘定照合などが完了しないうと分析作業ができないといった直列化した処理にある。『ブラックライン』は、『コンティニュアス・アカウンティング』を掲げ、会計システムと連携してデータをクラウドで一元管理することで、

縮めを待たずに毎日の処理や残高照合をしつつ会計業務の進捗を管理することができる。——ソリューションの強みは。 「勘定照合や差異分析などを自動処理するの強みは。 「勘定照合や差異分析などを自動処理するの強みは。 「勘定照合や差異分析などを自動処理するの強みは。

「働き方改革もあって、すでに引き合いは多い。今後は自社イベントを開催して事例を紹介するほか、国内のパートナー企業と協力して導入を勧めていく」

ふるはま・よしこ 東京都出身、47歳。1996年一橋大卒、SAPジャパン入社、2019年1月から現職。

財務報告業務を自動で

——金融機関での活用は。 「金融機関は大量のデータを扱うが、証券類の整理や確認など自動化されていない部分が多い。また、合併などで子会社ごとにシステムが異なるという課題もある。ブラックラインは取り込んだデータを夜間に自動処理し、問題のみを示す。さらに会計システムを補完する製品なので、利用環境に依存せず正確な業務を行える」

——国内戦略は。 「働き方改革もあって、すでに引き合いは多い。今後は自社イベントを開催して事例を紹介するほか、国内のパートナー企業と協力して導入を勧めていく」

（聞き手）山崎 貴大